



アッシジの聖フランシスコ (1)

はじめに

6月のイタリア旅行への誘いはアッシジの大聖堂で特別のコンサートがあるという案内にありました。曲目は知らされていませんでしたが「太陽の歌」は聴けると確信していました。個人旅行ではあり得ない特別な場所で聖人の生涯の遺言のように作詩し作曲された偉大で尊厳な曲を聴ける幸いを体感できました。その感動からこのテーマが頭に浮かびましたが、私の力では及ばない峻厳な絶壁の前に立つ思いです。ダンテが「東方からこの世界にさし出た太陽」(3)-11pと讃えた聖人です。

参考文献は次の通り、引用は番号で記します。

- (1)キアラ・フルゴーニ著「アッシジのフランシスコ」 白水社刊
- (2)武田友寿著「聖者の詩」(わがアッシジのフランシスコ) 聖母文庫
- (3)川下 勝著「太陽の歌」(アッシジのフランシスコ) 聖母文庫
- (4)石井健吾訳「アッシジに聖フランシスコの小さき花」 聖母文庫
- (5)藤城清治著「アッシジの聖フランシスコ」 女子パウロ会刊
- (6)ヨハンネス・ヨルゲンセン著「アッシジの聖フランシスコ」 講談社

どの本も大著ですが昨年出版された藤城清治さんの(5)は21年歳月をかけた渾身の作と言われています。他の研究者も同じでしょう。

ベストピアのような小史で書くのは酷暑でも背筋に寒さを覚えます。

(1) 誕生・両親

生誕は1182年(1181年説もある)

その生涯は短く44年(召天1226年10月4日)です。

父はピエトロ・ベルナルド、アッシジで有力な織物を扱う商人で、先見

力があり、当時世界からの商品が集積されていたプロバンスに仕入れの拠点を置き、アッシジと往来をし富をなしていました。そのプロバンスでヨハンナ（通称ピカ）という女性をみそめ結婚しました。長男が生まれたとき父はプロバンスにおり母は夫の帰りを待たずにジョバンニと名付けましたが、戻った父は改名して「フランシスコ」（小さなフランス人）と命名しました。

改名の理由は諸説ありますが、とくに「小さな」ということばが聖人の謙虚な生き方を見通しているかのようです。実にふさわしい命名であったとわたしは感じています。弟と妹がいました。

両親は自由奔放に育て、天真爛漫な性格が形成されていきます。母の子守歌は当時プロバンスで流行していた吟遊詩人が歌っていた詩と思われる。そのお陰でフランシスコは歌が上手でフランス語を話し身振り手振りのジェスチャーも豊でした。（これが後年の苦難の生活を克服する才能となる）父も息子を読み書きのできる商人に成長することを期待して当時としては珍しくサン・ジョルジュ聖堂付属学校に5年間（8歳から13歳）通わせました。フランシスコがここで学んだことは専門の神学ではなくラテン語を中心とする教養科目（当然聖書も読む、詩編は詳しく学んだ）であり、特に商業に関する知識（当時の世界の動きや算術）は幅広く学んだと想像します。父親は商業のことを熱心に厳しく（計算高く）教え、母は優しく父から叱られるわが子を愛おしむ、ごく平凡で平和な家庭環境で育ったと思いますが、23歳迄は商家を継ぐべく育てられたました。父親の夢は教養をつけ富に恵まれやがて騎士になり諸侯の列に加えられることで、フランシスコ本人も同じ夢を持って育っていきます。

(2)少年時代

チェラノのトマスが書いた最も古い伝記『第一伝記』による描写の一つを掲げます。

「世俗的なならわしに長けた両親から、この世のむなしきに倣って傲慢に育てられ、また彼（フランシスコ）自らも彼等（両親）の嘆かわしき生活ならわしを永くまねびて、益々軽薄に、益々驕慢に成りゆく」素質を形成した。(2)-p40

フランチェスコは「才気煥発な青年として成人すると（13歳と推定）布地を売って父の商売に携わったが、そのやり方は全く異なっていた。彼は父よりもはるかに陽気で気前がよかった。（金銭への執着心がなく、喜んで惜しむことなく貧しい人に施しをした）歌い、楽しみ、そして昼も夜も仲間の一団とともにアッシジの街をぶらつくことが好きだった。たいそう金払いがよく、宴会や他の楽しみごとに、稼ぎやもらった金をすべて費やしてしまった。（中略）それでも両親は裕福で息子をひどく可愛がっていたので、大目にみてしまい、息子の機嫌を損じないように、結局は好きなようにさせていた。（中略）服装もあらゆる点でひどく度を越していた。高価で贅沢な布地を身にまとい、独創的な格好を好み——」これらは全て父が織物商であったからできたことで、奇抜な格好はアッシジにおけるプロバンスのファッションモデルでした。兎に角、気前が良かった。商人のけち臭さがなかった。加えて「礼儀正しかった」ために、仲間やグループの人気者になり、快いリーダーシップを発揮できた。そこには彼の野心があった。彼は一商人で終わることを望まず、いずれ騎士になり、上流階級のリーダーになる事を志向していた。天真爛漫、陽気で喜びに溢れ、落ち込みもせず、実に明るい、楽天的な性格を形成していきます。

(2)青年時代

①1197年（15歳）アッシジ市民が神聖ローマ帝国と戦う

アッシジ市民が神聖ローマ帝国の侵略を防御するためにロッカ・マジョーレの城壁を破壊して外敵から守るために城壁を築きます。

フランシスコ少年もこれに参加し城壁建設術を覚えます。（この技術が後年の教会修復に役立つことになります）

少し歴史をひもときますと、1174年アッシジはドイツ皇帝（神聖ローマ帝国）のイタリア政策によって占領下におかれますが、3年後にはドイツ皇帝軍と戦い自治を獲得していました。ドイツ皇帝は「神聖ローマ帝国」と呼ばれるにふさわしくローマのあるイタリアを支配下にする野望を持っていました。（ローマは永遠の都の象徴であり続けている）

ドイツ皇帝に支配されると困るのがローマ法皇です。この頃ローマ法皇は世俗における権力を拡大し、又他の国を動かして聖地エルサレムを奪

還するという大義名分を与えて十字軍を編成させる等、巧みに戦争を各地で仕掛ける力を持っていました。

この時代、封建制が確立し、社会には厳しい身分制度があり、マヨールス（より大きな者＝王侯・貴族・高位聖職者・騎士）と呼ばれる上流階級とミノールス（より小さな者＝下級聖職者・農民・職人・商人・農奴）と呼ばれる庶民階級に分かれていました。商人の中にはフランシスコの父のように貨幣経済の発達によって富を蓄積できるようになったことを契機として財力を持ち、地元では政治的な影響力も持ち、上流階級を志向するものが現れました。

イタリアの諸都市はドイツ皇帝の支配下にいるよりも自治権が獲得しやすい法皇につく方が有利であると考えた法皇派と現状を維持しドイツ皇帝の支配下に留まることを志向する皇帝派に分かれました。競争の原理が働いたのかどうか、又は人為的であったかどうかは分かりませんが、隣接する都市は概ね対立構造になっていたといえます（今回の旅行で知りました）

アッシジは法皇派が多数であったのでドイツ皇帝と戦って1197年には皇帝派の見張り台ロッカ・マジョーレを占領し破壊し、その勢いで外部からの侵入を防ぐ防壁を造りました。然し、少数のマヨールスに属する人は封建制を維持するために（自分の今の位置や権力を守るために）自治を欲せずドイツ皇帝派に留まろうとして、アッシジの街の中でも二つの勢力に分かれていました

この二つの勢力争いが原因で内乱が起こります。

②1198年、アッシジ内乱、市民による自治政府を樹立

マヨールスの人々は隣接都市ペルージャに亡命します。ペルージャは皇帝派で喜んで亡命者を受け入れました。

この中に裕福な貴族の子女であったクララ一家がいました。

フランシスコ（16歳）は平民側にたって戦いました。「現実の場で、生地アッシジの友人や子どもたち、男や女たちが死んでいくのを見て、暴力のなんたるかを知り、負傷した身体の一部を失う恐怖を味わったかも知れない」(1)-p28。然し彼の道化た青春を謳歌する軽率さはあらたならず、バカ騒ぎは続きます。そこに再び歴史の愚かさが起きます。

③ペルージャとの戦い。1202年敗戦捕虜となる

アッシジがら追放された貴族たちは、失った地位と特権及び財産を取り戻したく、皇帝派のペルージャの力を借りて、アッシジに戦いを挑んだ。フランシスコも祖国防衛という純粋な気概と、武勲を立てて勲功をもらうことを狙って参戦しました。

この戦いは数年続き、1202年、フランシスコはペルージャの捕虜となって、約1年間虜囚の境遇に置かれた。この間の牢獄の生活も実に快活で他の捕虜からは狂人に思われましたが、「僕の前途はたいしたものですよ僕は世界中で讃えられるようになるんです！」と楽天家の極みとも思える言葉を発していました。(6)の著者ヨルゲンセンは「これは、彼の運命への堅い信頼、素晴らしい将来が約束されているという、落ち着いた確信に対する、最初の表現である。フランシスコの著しい特徴である」と記しています。(6)p22

父が莫大な額の保釈金のおかげで解放されましたが、貴族の捕虜と長い時間一緒に暮らしたので、この商人の息子は、益々貴族の生活と活動にあこがれるようになり、これから数年間は、前にもましてはしゃぎ気前のよい生活をおくります。そしてついに健康を損ない病に伏した。(放蕩の生活から脱出できたか?)

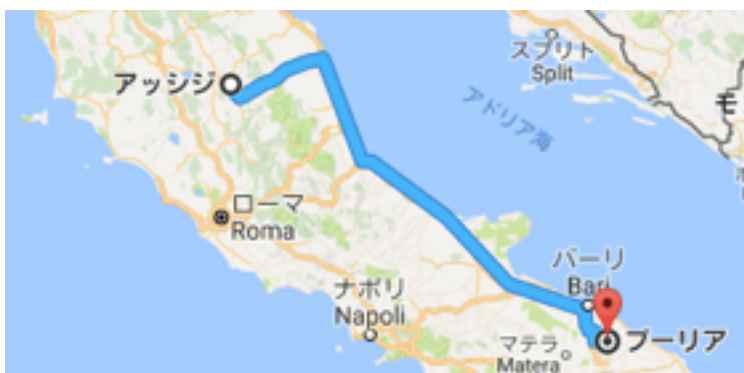
④1204年、病に伏す

「700年ほど昔のある朝のこと、アッシジで、重病のよくなりかけた一人の若者が目をさました」ヨルゲンセンの名著はこの文章で始まっています。

重病らしかった。母の優しさは時として過保護な看病になる。彼は杖をついてやっと戸外にで、そして「いつもとは別の目で眺める。前には柔らかい色合いの風景や、明るい空にくっきり浮かび上がる山並みの綺麗な線を眺めると心に喜びが溢れたものだが、今やそれはない。前には胸の中で若く強く鼓動していた心臓が、ふいに老衰したかのようである。もうなんにも喜びを感じないかのような気持ちになる。中略、不変の喜びだと思っていたものが、もう喜びではない。中略、杖にすがってとぼとぼ家に戻った」。確かにその日が彼のために来ていた。「神秘的な手が、死とはかなさという言葉、祝宴の広間の壁に書きつける日が。然

し、改心しかけた人々の例に漏れず、この若者はすぐに、自分自身の誤りと同じように、他人の誤りを考えた。「無常なものを好むとは、何と馬鹿な連中だ！」と彼は一種優越感をもって考えながら、家に戻った。然し、もとの生活に戻るにはそう時間はかからなかった。フランシスコの気前の良さにあずかろうと多くの友がやってきた。彼は父の仕事を手伝い、儲けた金は全部楽しみのためと貧しい人への寄進に用いた。虚栄の紐がすべて解き放たれてはいなかった。騎士になりたいとの夢からも覚めることは出来なかった。元の木阿弥となった。「彼を落ち着かせないのは、胸のうちのはっきりしない不安である。彼をたえず駆り立てるのは、魂にささったとげである。彼は以前よりも、遠い国外での大事業や冒険を夢みる」(6)p24 ほどなくその好期がやってきます。

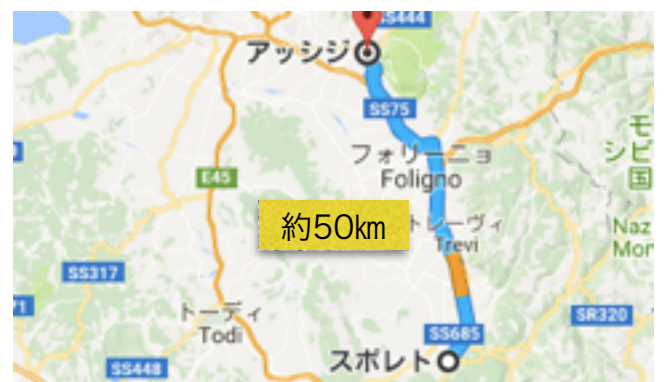
⑤1205年、ブーリア地方の戦争に出向く



この戦争も皇帝と法皇の戦いの一環で、皇帝の後継者問題で争いになっていた。敗戦を重ねていた法皇は、シチリアの豪放な武人ド・ブリエンヌ（シチリア王ルッジェーロ二世の孫）に助けを求め、戦いを優勢に導い

➔ (586.8 km) 「E55」 経由

た。この噂がアッシジにも伝わった。フランチェスコの胸は再び躍り上がり、「僕はこんど偉い殿様になるんだよ！」とはしゃぎまくり、ド・ブリエンヌに認められ騎士になろうと決断し、武装の準備を始めた。その武装は「独特で高価」豪華すぎて、父親ですら「それは誰が見ても商人と思われる姿ではない。身分の高い騎士の姿だ」とあきれかえったという。（この時夢をみるが難しい説明が必要なので略します）



喜びの幻想に勇んで故郷を出発しましたが、約50kmのスポレットで熱病にかかり寝込んでしまいます。すると「どこへ行くつもりか？」と尋ねる声を聞いた「ブーリアへ行って騎士になるつもりです」と応えた。その声は再び尋ねた「フランシスコよ！主人と召使いはどちらが大切か？」彼は「主人です」と答えた。「それなれば、何故主人を捨てるのか」の声に、彼は戸惑い「私に何をすることをお望みでしょうか？」と問いかける。声は「直ちに故郷へ戻れ、なすべきことはそこで示されるだろう。お前のみている幻は考え直さねばならないのだから」そこでフランシスコは目を覚ました。一晩中眠れなかった。朝になるとやおらおきあがって、馬に鞍をおき、今やたちまちむなしく思われた武具を身につけ、アッシジに帰った」(6)p27

この銅像は今、大聖堂へ向かう道端にあります。立派な武具と馬が哀しげに立っています。色んな思いと言葉が象徴されています。この複雑な思いを晴らすためにフランシスコは再び、すぐに陽気な友達のサークルの中心となっていき前にもましてお祭り騒ぎに興じ、饗宴の王を演じる程になりました。ブーリアへの出征の失敗を質されると彼は「自分の国で大きなことをするためだと自信たっぷりに答えた」(6)p28

又しても元の木阿弥か？

ところが1205年の夏のある晩、彼は盛大な宴会を催しその主賓となって、

集った友から讃辞と感謝の歌をあげた。それからいつものように列をなして、通りを歌いながら歩き回った。だが、フランシスコは列から少し遅れ始め、歌も歌わなくなった。ますます遅れ、小さな広場にひとり取り残されてしまい、恍惚として、気を失ったかのように棒立ちになった。どれだけの時間がたったか彼は覚えていなかったが、友達の一人が彼を探しに戻ってきた。友人は「おい、フランシスコ、そこに突っ立って、



騎士として出征したものの戦
わずして帰還したフランチェスコ
の像 (イタリア、アッシジ)

結婚のことでも考えているのかい」と呼びかけた。我に返ったフランシスコは「そう、結婚しようと考えていたところだ。でも、ぼくの求婚しようと思う花嫁は、君たちの知っているどんな女性より、気高く、金持ちで、美人だ！」戻ってきた友人数人が「じゃあ、プーリア行きの時みたいに、仕立屋が忙しくなるかな」とからかわれた。この時から彼は自分をみじめな存在だと感じ始めた。おろかさ、無計画さ、子どもっぽい虚栄心、道化――自分自身に腹立たしさを感じ軽蔑さえした。

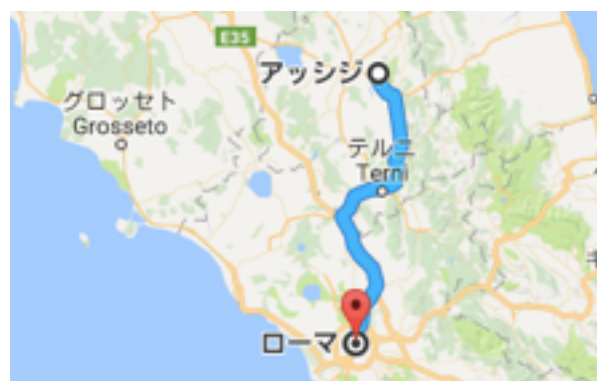
「夢に敗れ、希望に裏切られて後にやってくる青春の午後は静かな瞑想と反省のときだ」(2)p132

逆戻りしないためにどうしたらいいか？孤独、瞑想、祈りの生活が始まった。自分が今までにしてきた貧者への寄進について考えた。見栄っ張りの寄進もあったと反省する。「貧しいというのはどんなものか、通りすがりに小銭を投げ与えられる、ぼろをまとめて施しをうけるとは、いったいどんなものだろうか」を体験したくなってローマ巡礼した。1206年の春頃である。

ペトロ大聖堂に大金を投げ込んで周りの人が驚いて彼を見た瞬間に、彼の心が勇者になった。深い反省、心のうずきがあったのであろう。

本物の乞食を捕まえて、そのぼろの服を借りまとめて他の乞食にまじって聖堂の前の石段に立ち、フランス語で施しを求めた。ボロを着て施しのパンを食べた。ローマから戻り祈っ

ていたとき自分に刺さっていた一つの棘に気づいた。アッシジには2カ所のハンセン氏病の施設があった。その一つは彼の生活圏（アッシジとポルチウクラの間）にあり、いつも目をそむけ、出来ることなら避けて通っていた。ハンセン氏病以上の貧者があるだろうか。ハンセン氏病人は中世人の慈善の最大の対象であった。これに対する自分のもつ嫌悪感に大きな罪の意識を感じていた。ある日「いつものように神に呼びかけると、答えが与えられた」『フランシスコよ、わたしの意志を知り



(174.9 km) 「SS3」 経由

たいならば、心が愛し望んでいたものをすべて軽んじ、憎まねばならない。

そうし始めたら、前には快く好ましかったものはすべて耐えがたく、苦々しくなるだろう。だが、前に嫌っていたものすべて、お前にはとても快く、あふれる喜びとなるだろう』(6)p37

ついにこのことばで、歩むべき道は示された。

⑥ハンセン氏病患者への接吻

ある日のこと乗っていた馬が騒いだので、はっとして物思いから目覚めると、十歩か二十歩ほど前の所に、それとわかる特別の服を着たハンセン氏病人が立っていた。フランシスコはびっくり、馬もそうだが、彼自身がとっさに、できるだけ早く逃げようとした。すると、心の中で聞いていた「前にこわがったことは、お前の甘美な喜びとなるだろう」ということばが一拳に眼前にあらわれた。ハンセン氏病人ほどこわがっていたものがあるか。だから今こそ、主のことばに従って——自分の善意を示すときなのだ

ぐっところえ、フランシスコは馬から飛び下り、病人に近づき、差し出された半ばくずれた手に施しを与え、かがみこんで、むかつきそうなのをこらえ、傷や潰瘍におおわれた指に接吻した。彼はまた馬にまたがったが、どうして乗ったのかも、殆どわからなかった。気が動転して、心臓は早鐘を打つようだった。たどった道もわからなかった。だが、主は約束を守られた。甘美な幸せと喜びが、心に流れ込んだ。心はとうに満たされ、あふれたが、この流れはやまなかった」

聖フランシスコが遺言に残したこの時期の報告は「主はわたしの改心の手始めとして、罪深い生活を続けている間には、わたしがハンセン氏病人を診るのがとても辛いようになさった。ところが、主はわたしをハンセン氏病人の間にお導きになり、わたしはそれを手当した」(6)p38

それから以前に辛く思われていたことが、魂とからだの甘美に変えられた

人間のえられる最大の勝利を——自己自身への勝利をえた。この時から自分自身の主人となり、自分自身の奴隷（わたしたちのたいていがそうであるように）ではなくなった。

彼はキリストが歩んだ道を自らも歩むことを誓願とし、行動し「主よ語ってください。あなたの僕が聞いていますから」と祈っていた。

ほどなくして、荒れ果てたサン・ダミアノ教会で祈っているとき、主のことばがあった。「フランシスコよ、行って、わたしの家を建てなさい。倒れそうになっているから」(6)p44

フランシスコは直ちに行動を開始した。

この赤線の文章の訳と解釈は微妙なところで著者によって異なっています

(6)の著者ヨハンネス・ヨルゲンセンはこの記事に先立って聖フランシスコが生涯に渡って教会制度や聖職者を批判したことがないことを強調しています。「彼らがわたしをいじめたとしても、彼らは叙階された聖職者なので、わたしは彼らの保護を求めます」

あとがき

聖フランシスコのように有名な人は常識となっていますが、俗から聖へのダイナミックな転換を体系的に理解するとパウロの回心よりも身近な人間味があり、自分自身の生き方に希望を見出すことができます。

聖フランシスコの伝記は日本でも大正時代からあり、多くの著名人が研究し影響を受けています。今般もどの著作をテキストとするか迷いながら探し求め、たどり着いたのが(6)ヨハンネス・ヨルゲンセン著「アシジの聖フランシスコ」講談社（1977年8月8日初版）でした。この本の先見性は、フランシスコの遺骸の再確認（1978年）、環境保護運動の保護聖人（1979年）に先駆けている点でも明らかなように、その後の研究者の基本書となっています。このことにわたしが気がついたのが7月24日でした。この本によってわたしの空白地帯が埋まりました。完読、精読に至っていませんので今月はここまでにし来月に続きます。

どなたか「太陽の讃歌」の音楽テープをお持ちではありませんか？

探しております。何か情報がありましたらお知らせくださると幸いです。

小さいですが簡単な年譜を添付しました。

アッシジの聖フランシスコ

1096		第一回十字軍 1099	
1099		南仏に吟遊詩人が現れる	
1147		第二回十字軍 1149	
1150		南仏を中心に吟遊詩人時代始まる	
1174		アッシジ、ドイツ皇帝軍の占領下に入る	
1177		アッシジ市民、ドイツ皇帝軍と戦い自治を獲得	
1182	生誕		両親について
1187		第三回十字軍 1192	歴史的背景
1190	サン・ジョルジュ聖堂付属学校に通う		青年期の生活態度
1193		クララ誕生	
1197	城壁築造に参加	アッシジ市民、外部からの侵入を防ぐ城壁を築く	
1198	アッシジの内乱	アッシジの内乱 貴族と市民の対立、アッシジ住民が神聖ローマ帝国の要塞を破壊、都市内で貴族と平民の戦い	クララはベルージャに移る 1203
1200	この頃放蕩に明け暮れる		
1202	ベルージャとの戦争で捕虜となる	第四回十字軍 2004	生活に変化、転換が始まる
1203	解放されアッシジに戻る。病気に伏す		
1205	騎士志願するもスポレトで夢をみて気が変わる	アッシジに戻る。放蕩生活に疑問を感じ孤独瞑想へ	生活に変化、転換が濃くなる
1206	ローマに巡礼、乞食を真似る	アッシジに戻って、ハンセン氏病者への接吻	転換が完成する
	サン・ダミアノ聖堂の修復のお告げの夢をみる	洞窟で隠修士のような生活をおくる	
	父と衝突、司祭裁判、サン・ダミアノ		誤解と迫害の生活
	ボルチウンクラ聖堂の修復にかかると		
1208	ボルチウンクラ聖堂での啓示	マタイによる福音書10章の啓示、市中で説教を開始	弟子が8人となる
1209	会則創案	ローマにイノケウティウス3世を訪ねる	弟子が12人となる
1210	会則口頭で認可（修道会設立）	原始会則が認められ説教権が承認される	
1211	クララと始めて会う		
1212	クララ参加	クララは家ですべてボルチウンクラ聖堂に入る	クララの妹アグネスも5日後に加わる
	シリア伝道、モロッコ伝道を試みるが失敗		
1214	オランダ伯よりアルヴェルナ山を寄贈される		
1216		第4回ラテラノ公会議	
1217	筵（むしろ）の集会（総会）	イタリア外の布教を決める。第五回十字軍～1221	
1219	十字軍に従軍 イスラム教徒への伝道	エジプトに向かう、ダミエッタ滞在中スルタンと会う	
1220	修道会の実権を弟子に譲る	ピエトロ・カッターニ	モロッコで弟子5人が殉教する
1221	カッターニが逝去し兄弟エリアが実権を握る	フランシスコの理想・精神が薄れていく	
1223	新会則が承認される		
1224	9月17日アルヴェルナ山で聖痕を受ける	冬にはボルチウンクラに戻る。聖痕の痛みと胃病に苦しむ	
1225	ウンブリアを歩いて説教を行う	春、眼病治療のためリエティに行く、この旅の途中	
		サン・ダミアノに立ち寄ってクララに会う。	
		容体急激に悪化して床につく。クララの看病をうけて	
	6月、「太陽の歌」の詩想が浮かび作詩する	6週間闘病の日々を送る（4月～6月）	
		サン・ダミアノを立ちリエティに向かう。眼病の手術を	受け6月から翌年2月迄滞る
1216	眼病治療のためシエナに滞在	シエナで容体が悪化コルトーナを経てボルチウンクラに戻る	
	10月3日ボルチウンクラで召天	翌日サン・ジョルジュ聖堂に埋葬	